九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

M・テムマン『アンドレ・マルローの日本』

畑, 亜弥子

https://doi.org/10.15017/10035

出版情報：Stella. 19, pp.165-168, 2000-09-05. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

M・テムマン『アンドレ・マルローの日本』

畑　亜弥子

アンドレ・マルローは日本を4度訪れた。最初の訪問は1931年で，以後58年，60年，74年とつづく。日本に対する彼の視線が，ロティのそれに代表されるような異国趣味とは一線を画するものであり，日本人や日本文化の本質を見極めようとする真摯なものであったことはよく知られている。というのもマルローが訪問のたびに多くの証言を残し，また見聞したなかでとくに印象深い事柄ついては，のちに著作で大きくとりあげ考察を深めているからである。本書は，こうして残された夥しい資料を手際よく検証・整理しながら「マルローが見た日本」の全体像を提示する[1)]。

ちなみに同じテーマをあつかった研究書はすでにいくつか存在している。まず第一に挙げるべきは竹本忠雄の仏文著書『アンドレ・マルローと那智の滝』であろう[2)]。コレージュ・ド・フランスでの講義をもとにしたこの本は，われわれに知られざるマルロー晩年の思想を解きあかすとともに，彼にとって日本がいかに重要な考察対象であったかを認識させた。また林俊の『アンドレ・マルロオの「日本」』（中央公論社，1993年）も忘れてはならない。「1930年代の日本におけるマルロー神話の生成の跡を辿った」同書は，みごとな「日本におけるマルロー受容史」を提示するばかりか，未公開のマルロー＝小松清往復書簡という第一級資料をふんだんに盛り込んだ実証的価値の高いものでもある。林はまたクロード・ピショワとの共著『小松清〈ヒューマニストの肖像〉』（白亜書房，1999年）において，マルローと小松とのあいだに交わされた友情をあますところなく描き出している。

このような先行研究に対して，著者テムマンは「マルローが見た日本」をさらに総体的に描き出した点で新たな貢献をしたように思われる。さっそくその内容を略述・紹介することにしよう。

まず「日本の誘惑」と題された第1部では，マルローの訪日が「フランス文

化の代表者」と「千年以上の歴史をもつ国家」との出会いととらえられ，その意義が問われている。テムマンは，1931年の訪問をとおしてマルローが日本の重要性を真に意識したと主張し，その痕跡を『人間の条件』に見る。最初の訪日で「切腹」という日本固有の自死観や邦楽についての見識を深めたマルローが，これらの要素を『人間の条件』に取り入れたことはこれまでにたびたび指摘されており，テムマンもまた従来の見解を踏襲している[3)]。この著者の手腕が光るのは，むしろ1958年と1960年の訪日の背景を説明するくだりである。ドゴール政権のもと文化担当国務大臣として来日したマルローは，最初の訪問のときと比べて，この国が大きく変化していることに気づく。つまり物質主義的でアメリカナイズされた「新しい日本」が台頭し，神道にもとづく精神主義的な「古い日本」の存在が危うくなっていると認識するのである。このときマルローは「私が愛する日本とは奈良の日本だ」と述べたが，テムマンの記述はこの発言の背景に対アメリカという政治的意図が少なからずも働いていたことを示唆してくれる。

つづいて第2部「日本美術と空想の美術館」では，日本美術に対するマルローの見解が紹介される。マルローは日本美術が西欧美術とは異なることを確認するだけではなく，中国の美術とも截然と区別されうる独自性をもつことを主張する。これにかんしてテムマンは，日本美術がマルローにとって芸術的・形而上学的な思索に有意義な「問い」をなげかける重要な存在であったことを指摘し，実際に注目された作品群を列挙している。たとえば「書画」や「禅画」は文字や余白を含むその画面構成が，西欧的絵画フォルムを逸脱した奔放さをあらわしている点で注目され，また京都の竜安寺の石庭は，禅の世界観をみごとに空間化している点でマルローに極東の思想をかいま見させたのであった。そんななかでもとりわけマルローの興味をひいた作品は藤原隆信の『平重盛像』であり，テムマンもこの肖像画が「空想の美術館」で最も大きな位置を占めると述べて大きく紹介している。マルローの目をひいたのは，台形型に描かれた人物の幾何学的構成と，絵がかもし出すこのうえない穏やかな雰囲気である。当時ヨーロッパでは浮世絵が流行していたが，マルローはそういった風潮に対抗して，この肖像画こそ「日本で最も名高い絵画」と見なしたのであった。

さらに「親愛なる，永遠なる列島，あるいは《根源対根源》の対話」と題さ

れた第3部では，マルローが日本において深く考察した諸概念が紹介される。すでに述べたように，2度目の来日のさいマルローは「2つの日本」の存在を認識した。そしてこのときからこの「2つの日本」がマルローのなかで対話をはじめたとテムマンはとらえるのである。まずは第1部でとりあげられた「切腹」が再び考察され，つづいて那智の滝や伊勢神宮で見いだされた「自然」について説明される。ここで最も大きくとりあげられるのは，『反回想録』における〈坊さん le bonze〉との会話である。1972年，マルローは初版に大幅な修正をほどこした新版『反回想録』を出版する。〈坊さん〉との会話は，まさにこのときの加筆である。〈坊さん〉とは，マルローの戦死した友人マツイ・タキョウなる人物の父親で，美術史を教える大学教授なのであるが，その風貌から〈坊さん〉という名で呼ばれている人物である。この〈坊さん〉とマルローが芸術や運命や永遠などについて長い時間語りあう場面が新版『反回想録』に収録されるのである。ここでテムマンは「国家のアイデンティティ」と「宗教」をめぐる2人の議論に注目して，マルローがどのようにして日本的精神を〈坊さん〉のなかに具現化しているかくわしく説明している。

最後の第4部は「マルローの日本人」と題され，マルローと親交のあった日本人たちが列挙される。とうぜん小松清には多くのページがさかれ，両者のあいだにあった厚い友情が書簡をつうじて描き出されている。そんな小松も1962年に先に他界してしまうのだが，マルローは以後も晩年に至るまで竹本忠雄・堀田郷弘をはじめ，多くの日本人たちと親交を結びつづける。ここでは対話や翻訳などでマルロー研究に大きく貢献した竹本の業績がとりわけ詳しく紹介されている。

以上，駆け足で本書の内容を紹介した。マルローが日本について述べたことは，ほとんどすべて収められているといっても過言ではない。また言及された芸術作品や建造物についての基本的な知識や，おのおのの発言の歴史的背景などもわかりやすく論じられている。ただ残念なのは，それがやや過ぎて記述が説明的になり，いくつかの重要な概念については分析が深いところにまで及んでいない点である。たとえば「切腹」の概念は，『人間の条件』の清や蒲といった登場人物の人格に反映されているばかりでなく，作品世界における「死」の重みを軽減する役割を果たしたという点も指摘できるはずだ。また「内的現実」の概念についても，これがマルローの芸術思想に占める位置の重

要性を考えればもっと大きくとりあげるべきであろう[4]。くわえて書誌末尾の「日本におけるマルローの著作」の項に不正確な記述がいくつか認められる[5]。このようにあら探しをすれば若干の不備は指摘できようが，だからといって「マルローが見た日本」を広い視点から総体的に論じたその功績が減ずるわけではない。今後マルローと「東洋」との関係，あるいは晩年の思想を論じようとするものにとって必読の一書となることは確実であろう。

註

1）Michel TEMMAN, *Le Japon d'André Malraux*, Arles: Éd. Philippe Picquier, 1997, 269 pp.

2）Tadao TAKEMOTO, *André Malraux et la cascade de Nachi*, Alençon: Juillard, 1989, 177 pp. また竹本にはほかに対話集『マルローとの対話——日本美の発見』（人文書院，1996年）がある。

3）これについてはとくに以下を参照——小松清「人間マルロオ」，『アンドレ・マルロオ』，新樹社（現代フランス作家叢書），1949年；Christiane MOATTI, «Le motif du Japon dans *La Condition Humaine* d'André Malraux», in Alain CRESCIUCCI, *Malraux. «La Condition humaine»*, Paris : Klincksieck, coll. «Parcours critique», 1995, pp. 157–179.

4）「内的現実」については次の論考が示唆的である——大久保ゆき「マルローと芸術世界の構想——極東芸術における〈内的現実〉の発見」，『仏語仏文学研究』第15号，東京大学仏語仏文学研究会，1997年，203–219頁。

5）たとえば邦訳『神々の変貌』は，1959年5月から1962年8月にかけて小松清の訳で『芸術新潮』に連載されたが，筆者の承知するかぎり今日にいたるまで単行本化はされていない。しかしながらテムマンの書誌には，これが1962年に新潮社より出版されたと記載されているのである。